

団長が姿を消して
しばらくが経過し…

団員の方々は団長の
手がかりを求めて
各方面に散っていきました

そんな中…
アウギユステで
不穏な噂を耳にしたのです…

団員達が消息を絶つ…

私もエニユオと共に
アウギユステへと
向かったのですが…

迂闊でした…

——このエニユオと
いう存在が

変わらず『邪悪』のまま
その牙を研いでいたと
いうことに——

『ふふふ…ようやく
この時が来ましたわ…♪』





「貴方のその体と盾を壊して」

「その奥にあるモノ全てを 蹂躪できるこの時がね！」

本気で抵抗したら
殺してしまう
かもしれない

でも...それ以上に
この状況はまずい...

団長が不在で
団が混乱している
この時を狙うとは...

おそらく
私を犯している
この者たちは
操られている...

まさかエニユオが
幽世の住人と
手を結んで
いただなんて…!!

「くっくくく…」

彼らの目的は一体…?

「これからこの魔晶石が
付いた槍を
貴方の子宮に打ち込みます」

「結晶が子宮に
到達すると
ゆっくりと
変化を始めるわ」

「大丈夫、痛く
ありませんから♪」

「子種の方も
かなり子宮の
中に入ったようだな」

ちゅん…

「ええ、予定通りだわ」

「ふふっ、ねえアテナ
貴方、これから
ママになれるのよ」

いん…

「な…っ!!」

星晶獣である私を
孕ませる!!
そんなことが本当に…?

ですが、それが
真実だとしたら…

「子宮の中にある
星晶獣としての
力を吸収しながらね…」

何としても
阻止しなければ…!!

どんな仕掛けが
あるのか
わかりませんが

あの程度の魔晶なら
私のアイギスで
受け止めた瞬間
碎ける!

この一撃を弾いた瞬間…

その時がー

勝負

アイギスを通して…

す…!?

何か

が…っ!?

「あはははっ！
すごいー！」

「噴水みたいですよ」

『でも思った通り
貴方の…盾でも
防げないようですね』

『この魔晶は魔力に
反応するそうです』

『あなたの子宮に
ある精液…
その魔力に』

『『快楽の波動としてねっ!!』』

だめっ
アイギスで防いでも…っ

子宮に…っ!!

感覚…の…っ!!

波が…っ!!

爆発するように
広がって…っ!!

「ふふふ…あははは!!」

「いい!とてでもいい声ですっ!」

「分かりますよ
貴方の強靱な
心と盾が一突きごとに
ヒビ割れていつてるのが!!」

こんなツツ!!

私の盾を…
こんな方法でえっ!!

「さあアテナツ!!」

『これで——』

感覚が…どんどん
大きくなって…っ!!

ああああ…っ!!
集中が…アイギスが
維持…でき…な…

アイギスが
維持できない——っ!!

『——トドメです!!』



「ふふっ」

「おめでとう、アテナ」

「これで貴方は新しい命を
孕めるようになりました」

「ああ…先ほどのような
悲鳴をこれから何度も
聞けると思うと」

「ああ…ソクソクして
イってしまっ
そうです…」

その牙が私の子宮に
振り下ろされたのを
感じ取れた…

薄れゆく意識の中
埋め込まれた
魔晶がゆっくりと
号を開き

「ふふっ」

エニユオに敗北し、
肉体を改造された
私の前に現れたのは…

星晶獣を孕ませるために
作られた異形

幽世の何か…

抵抗力を失った
私を捕縛し
その性器を
捻じ込んできたのです

「だめっそこは…っ!!!」

「やめ…やめなさい!!!」

その異形から
湧き出てきた
無数の触手は—

触手は膣内で
さらに
暴れまわり――

硬く閉ざされた
子宮口を貫いて
きたのです――

「さああファイナールです！」

この醜い触手の子種を
子宮の中になっぷり
出してもらうといいわ！

触手の動きがさらに
激しく子宮と直腸で
暴れまわる

「あゝあっ！」

「やめっ!!」

「いあやああっ!!」

「子…宮…につり！」

「あははっ、言い忘れてました」
「その触手は、確実に
受精させるために
母体の子宮にまで
入るそうですよ、フッフ」

一斉に子種を
吐き出す触手たち

「ぐぐぐ!!」

「あああああああああああああ!!」

両手両足を広げられ
大事なところ全てを
晒されたその状態では

洪水のように
流れてくる子種を

限界まで広げられた
無防備な子宮の最奥で
受け止めるしか
ありませんでした。

「がはっ
あああああ!!」
腹内：腹内にいる!!

触手で膨れていたお腹は
さらに勢よく
押し上げられ!!

濁流の波は
あつという間に
子宮を満たし

人とはかけ離れた
子種たちの
恐ろしいまでの繁殖が
始まったのです

星晶獣ゆえに
子宮内部で何が起きている
のかがわかってしまう悲劇!!

「受精」とは到底言えない
まるで1つの生物の
「捕食」のような

卵管に漂っていた
生まれたての卵子は
一瞬で飲み込まれ

喰らいつかれた
卵巣は犯され
その力を奪われて
いったのです

言葉にならないほどの
快楽と絶頂

数千…数万…
およそ数年分の卵子が
吸収され

それと同じ数だけの
快楽が私を襲った頃…

意識は完全に闇の中へと
沈んでいきました…



幽世の技術で作られた
生体装置に繋がれ...

お腹の子に力を
奪われながら出産を
繰り返していました

「お乳をこんなに吹き出して
ほんと、だらしない
お母さんですね、貴方は♪」

「綺麗だった貴方のアソコも
今では醜く涎を垂らして
汚らしい怪物を産むだけの穴」

「ああ…なんて惨めな
姿なんでしょう」

彼女の言う通り
守護と平和を司る
星晶獣である私の子宮は…

もはや陣痛と出産で何度も
絶頂をしてしまうほど淫らに
なっております…

本来硬く閉ざされた
子宮口をだらしなく
広げながら

平和を脅かす魔獣を
何度も出産する子袋に
なり果ててしまいました…

「でも安心して
くださいアテナ」

「貴方がどんな姿になっても
ずうっとハズリーッと
可愛がつて差し上げますよ」

「いつまでも…
貴方が壊れるまで…」

すぐそばでエニユオが
ささやいてくる…

この狂気に満ちた後景は
続くだろう…

「私」という
玩具が壊れるまで…